2010年　白道会大会

温もりと笑顔の中で

―病める方々と共に生きる―

去る八月二十八日・二十九日、蔵本通支坊で白道会大会が開催されました。結成そろそろ百年になります。

今年は、鹿児島で緩和ケアスタッフ歴二〇年、長倉伯博先生にお越し頂きました。鹿児島大・滋賀医科大・龍谷大などで講師もされています（以下、公開講演会の要約）。

仏教と医療

「通常の医療は、患者の体温とか血圧とか、数字を大事にしますが、私の所属する医療スタッフは、患者の表情、〝温もりと笑顔〟を大切にする医療チーム」と自己紹介。

そして、仏教と医療、ビハーラ活動の〈歴史〉についてのお話。いのちの尊厳にかかわるさまざまな問題に、医療や社会福祉とともに実践を展開してゆこうとする活動をビハーラといいます（『ビハーラ活動』本願寺）。ビハーラとは、サンスクリット語（インドの古い言葉）で「安住」。「お寺」とも訳されています。

そして次に、仏教と医療の〈目的〉について。仏教は、誰もがかかえる四苦八苦が課題。お釈迦さまは、それは生まれた時から抱えているもので逃げられない、誰も変わってくれない、ずっとかかえて生きてゆくんだというのが仏教の基本。ただし、その苦しみをかかえたまま、生まれてきてよかった、生きてきてよかったといえる道がお釈迦さまの求めた道です。

他方、医療は、身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな問題を抱える患者とその家族のできるかぎり可能な最高のQOLを実現するのが目的（WHO緩和ケアの定義・1990年）。身体はもとより、イライラや落ち込み（心理的問題）、かかるお金のこと、仕事のこと、遺す家族のこと（社会的問題）、生きている意味、死後の事（スピリチュアルな問題）を抱えている患者、患者だけでなくその家族のQOL（いのちの質）を高める、つまり生まれてきて良かった、生きてきて良かったと思えること、それが医療の目的。病気を治すことはそのための手段。

私たちは、仏さまの教えを通して人を支える仕事。医療者は、医療を通して人を支える仕事。大切なことは、人のいのちはいつか終わるということ。

温もりと笑顔のために

私たち医療チームが大切にしていることは「笑顔」。先生は、そのために大切にしている姿勢についてお話くださいました。「ただでさえ暗いところに、もうひとつ暗いものをもってくる見舞いは来るな」という患者さんがいた。お見舞いする人が、相手を逆に傷つけていませんか？頑張り過ぎるほど頑張っている人に「頑張って」は残酷です。井上ひさしさんの言葉、「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく、おもしろいことをまじめに」は、私たちに大切な示唆を与えてくれます。

続いてアルフォンスデーケンさんの言葉を紹介。「にも関わらず笑うというユーモア」について。そして「温もり」。悲しくて切なくて凍り